

「異楽共生」について

(SDGs 地域推進プロジェクト)「こここ CO ライブ」

プロジェクトリーダー：西村日出男

【四文字繋がり】

どうやら表題の四文字繋がりには、私の造語のようです。ネットで検索しても「異文化共生」「多文化共生」などはヒットしますが、「異楽共生」はヒットしません。したがってこの四文字は熟していないので、熟語とは言えないかもしれません。しかし、今の私の考えをうまく表現できたと思っています。

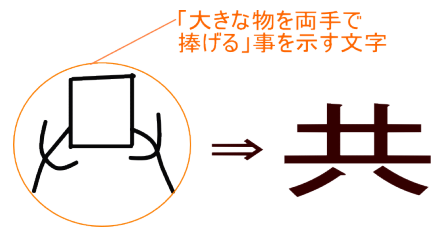
一つは「異を楽しみ、共に生きる」を意味します。もう一つは「異が楽しみ、共に生きる」を意味します。

「共生」は一般によく使われていますが、それに「異楽」を付けただけです。「共」の対立語としては「別」も考えられますが、ここでは「異」を使いました。「楽」は生命の積極的な充実感を表現しています。逃避的、手抜き「楽」ではありません。

【共・ともに】

漢字「共」の字源は、物を両手で供える、捧げるから転じて「ともに」の意味となったようです。

ラテン語で「共に」を表す接頭辞 cum はその後ろに続く綴りによって、con-や co-などに変わります。



SNS『漢字/漢和/語源辞典』より

英語では「共に」を表す together, with, share などが考えられます。また、co-ed は「男女共学」を表し、collaboration や cooperation は「共同研究」や「協働」などと訳されます。これらにはラテン語の接頭辞 cum の変形が組み込まれています。

【共生】

「共生」は英語では symbiosis を充てますが、これはギリシャ語系です。sym 前綴、σννは「共に」を意味する接頭語で、bi は「生きる」(bios=life:生命)で、osis は名詞の語尾に使われます。したがって「共に生きること」の意味です。

「共生」はもともと生物学の用語です。「相利共生」や「寄生共生」などとして使われていましたが、やがて宗教的、社会科学的な意味合いでも使われようになり、今日に至っています。私が主に意図しているのは社会科学的な「共生」ですが、生物学的な意味は大変参考になります。

こん日、改めて「共生」を使う時、仲間や同質の者や家族が共に生きる意味では使いません。「共生」は「異との共生」の意味を含んでいます。「共生」は

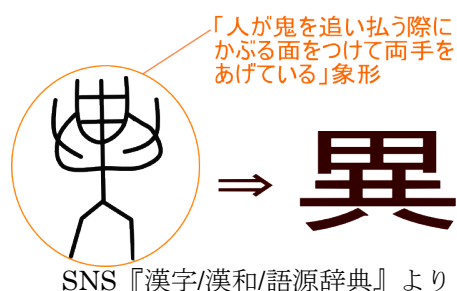
「共」の字源のごとく、異なる右手と左手を一緒に使うように、異質を認めた上で、あるいは異質を克服、超越して共に生きることを意味しています。その意味では「包摂」や「寛容」と似ています。

【異楽】

さて「共生」の前に付けた「異楽」ですが、先にも述べましたように、二つの読み方、解釈ができます。一つは「異を楽す」、もう一つは「異が楽す」です。後者は「異なる人」「いろいろな人」です。「異楽」は「共生」の前提条件、あるいは「共生」の目指すべき生命の有り様、状態を表現しています。すなわち、「異楽」が有ってこそ「共生」できるし、「共生」は「異楽」を志向すべきであるということです。

【漢字の異】

漢字「異」も象形文字です。「人が鬼（悪霊）を追い払うためにかぶる面を着けようとして両手をあげている」象形で、それをかぶると恐ろしい別人になる事から、「ことなる」、「普通でない」などを意味する「異」という漢字が出来たようです。「共」の上の「田」は仮面を表しているのです。両手をあげているところは「共」と共通していて面白いです。



秋田県男鹿の「なまはげ」など、異界からの来訪神がこのほど世界無形文化遺産に認定されました。漢字「異」の由来と共通点を感じます。

【異とは】

「異」は「共」に含まれています。「共」を前提に「異」が有り、「共」が無ければ「異」は存在しません。つまり、「異」とは共通を前提に、共通でないことを表現しています。たとえば「異性」は人間と言う共通性を基に男女の違いを言います。「異端」は正統（多数という共通）と認められないことです。「異様」は日常性や常識から外れている様です。言い換えると「異」とは自分や自分達に未知なもの、自分や自分達と異質なものです。たとえば、ある人にとって未知の物や自然界の法則などは「異」であり、自分以外の人や文化なども最初は「異」です。

【日常生活の異】

日常生活に「異」なことは多く有ります。突然、雷鳴が轟けば誰もが驚きます。突然とは「異」な状態です。しかし敏感な人、感性豊かな人は些細な変化に「異」を感じ、驚きます。たとえば芭蕉は何の変哲もないカエルが水に飛び込む水音に「異」を感じ、情景を句に詠みました。「古池やかはず飛び込む水の音」これは「外の異」です。

一方、「内の異」も有ります。喜怒哀楽などの感情は何かの原因が縁によって人の内面に現れます。「縁」はある意味で「異」を同化する契機です。問いも「異」との遭遇です。ニュートンはリンゴの実が木から落ちるのを見て、「おや？なんぞ？」と問いかけ、その問いに取り組み、万有引力を発見しました。

教育において「興味」は重要な課題です。英語では「興味」に **interest** を充てることが多いですが、その語源が興味あり、面白いです。**inter** は「間」です。**est** は「存在、to be」です。つまり、「主体と対象との間にある」を意味しています。「興味」は主体と対象との間に異を感じ、主体に取り込もうとする心情と言えます。「興味」は固定観念を破り、成長しようという意気込みとも言えます。**interest** は「縁」と似た発想です。ちなみに **inerest** には「利子」の意味もありますが、これの方が語源的な意味に近いです。

【楽】

「異楽」の「楽」は生命の積極的な充実感を表現しています。逃避的、手抜きの「楽」ではありません。「楽」は生命が快い状態のことと言えます。「楽」の反対は「苦」と言えますが、「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」の苦楽は相対的なものです。「苦」を離れて「楽」は無いと考えれば、苦楽合わせて生きるのが人生とも言えます。

人は「異」に出会うと一瞬、不安になり、苦痛を感じるので、できれば避けたいと考えてしまいがちです。「異」を避ける「楽」も考えられますが、ここではその意味では使いません。共生は異を「排除」するのではなく、包摂して生きる意味が強いです。少数者への「配慮」が共生の生き方です。

【異楽のプロセス】

「異」を楽しむには、まずは異変を感じ、「異」に興味、関心を持つことです。教育的にはそのような機会を準備することです。具体的には経験や体験の機会を準備することです。未知の経験や問題は「異」との遭遇です。

その「異」を受け入れることで、楽しみを感じる事が出来ます。言い方を変えると「異」を消化することで人は個人的にも集団的にも成長します。消化とは異物を同化することです。たとえば、食物摂取については咀嚼、消化、吸収のプロセスが考えられます。受け入れるとは知ることであり、納得することです。このプロセスは学習とよく似ています。

楽しむとは自分の希望や目標が達成した「喜び」というより、達成に手ごたえがあることであり、あるいは達成に苦闘している時、夢中になっている時に感じます。その意味で、苦楽合わせて楽と言うことができます。例えば私はテニスをしますが、試合に勝つ喜びもさることながら、ボールを追いかけ、ラケットをコントロールし、打点を決めて相手コートに打ち返す。その一瞬一瞬が楽

しいのです。だから 38° C のコートでもゲームができるのです。

異楽あってこそ共生に意味が有ります。共生が苦痛だけであれば、争いになります。共に生きる人々の生活や人生に貧富や権力の差があまりにも大きければ、妬みや怒りが生じます。これは「共生」ではありません。

【SDGs】

国連が 2030 年までの目標として決議した SDGs の基本理念は「誰も置き去りにしない (no one will be left behind)」と表現されます。これは言い換えると「共生」への決意です。しかもただの共生ではなく、豊かな「共生」、生きいきとした「共生」、楽しい「共生」でなければ意味が有りません。奴隷のような「共生」、不安・危険な「共生」、あるいは生物学的な「寄生共生」「片利共生」のような「共生」は SDGs の理念ではありません。(cf.1,2,3) それを私は「楽」の一字に込めました。

【こここ CO ライブ】

「長岡京市環境の都づくり会議」に新たな「こここ CO ライブ」プロジェクトを立ち上げました。これは「こここなた・これから共に・生きいきと」の五七五を短縮・変形したものです。これは日本語的に SDGs の基本理念を表現したいと苦心した結果です。ロゴマークも SDGs を借用しました。語呂合わせで「共に」を CO で表現し、「生きいき」は英語のライブ(live) を充てました。しかも CO を名称の真ん中に置きました。(私は「共生」の英語をラテン語的に collive という造語も可能と考えています。)



【プロジェクト名の説明】

「ここ」は、今いるところ、地域であり、この地球です。「こなた」は、自分であり、主体です。「こなた」は二人称(あなた)などにも使われます。「これから」は、今を含む未来に向かう持続可能性です。「共に」CO は、いろいろな人やモノと一緒に、他の生き物そして地球と一緒にを意味しています。「共生」 symbiosis であり、「包括」 inclusive でもあります。「生きいきと」は英語のライブ live であり、あらゆる「もの」がその生命・存在を「まっとう」 well-being できる「こと」への願であり、その「まっとう」に向けて微力を尽くす決意でもあります。もちろん「生きる」live 意味も含みます。

【異楽共生】

あらゆる人は「異」の中にあり、「異」を感じ、「異」を知り、「異」を認め、できれば「異」を支援することを含めて「異」を楽しむことが出来ると考えられます。それを私は「異楽共生」と呼んでいます。

(2019.2.11.未完)